

## 第2回研究発表会要旨

(1994年12月10日, 早稲田大学文学部第5会議室)

## オズヴァルト・フォン・ヴォルケンシュタイン論の試み

——自然描写について——

石井道子

「最後のミネ歌人」とも言われる中世後期の詩人オズヴァルト(1377-1455)は多岐のジャンルに渡る120余りの作品を残している。それらは伝統をひき、テーマの上で独創的なものはない。しかし、いくつかの点でオズヴァルトには中世から近世への移行期の文芸としての特徴が認められる。その一つが自然描写である。

中世盛期の文芸において、自然描写は貧弱であった、自然は常に象徴的な意味を含んでいた。例えば「夏」とは理想的な状態の象徴であり、同時に放埒な欲望と喜びの暗示であった。そして、「自然」そのものは描かれなかった。つまり、その描写は歌や場面のテーマに縛られた一種の記号であった。そして情感とは切り離されていた。

「ターゲリート」と「夏の歌」での描写について、オズヴァルトの歌と盛期中世の作品群とを比較すると、オズヴァルトが伝統を踏襲しているのは明らかだが、その上に伝統的描写の要素を量・質的に発展させ、膨らませていることが分かる。「ターゲリート」では、事細かな描写によって、情景は具体性を増し、我々が歌全体を感じとる助けになっている。

「夏の歌」では動詞の多用や類語の重なりによるリズム感が表現に動きを与え、自然の様子と陽気な気分とが容易につながっている。夏は擬人化され、また夏そのものをテーマにした歌もある。

更に、従来の「自然」は非日常的で反宮廷的な存在、あるいは理想郷であったが、この点でもオズヴァルトには従来とは違った自然観がある。宮廷的な存在も自然に含まれるものとして描かれ、つまり、自然と自我は共存している。このような捉え方が新しい表現を生んでいる。彼の「ターゲリート」「夏の歌」には、人と、対峙する風景とがある。自然と人物の描写を絡み合わせ、表現の深さを与えることに成功している。

オズヴァルトの作品には「風景画」的な自然描写がみられる。これは中世的な伝統を脱していると評価できるだろう。ここでは風景に心が届き、風景によって感情が動かされる。このように、オズヴァルトには今日の意味での「風景」の芽生えがみられる。